

# サピエンス全史

ユヴァル・ノア・ハラリ 著  
第二部 農業革命

2017・7・8 大下光雄 担当

# 第5章 農耕がもたらした 繁栄と悲劇

## ◆ 10,000年前に農業革命が出現

\*サピエンスが動植物種の生命をコントロール可能に。そこに全ての時間を投入し始めた。 → 農耕への移行。

\* トルコ南東部、イラン西分とレヴァント地方で開始。 小麦、ヤギ、エンドウ豆、オリーブ等。更に、馬、ブドウ、ラクダ、カシューナッツ。 \* 過去2,000年内にこの時以外に家畜化・栽培化された目ぼしいモノは無い。現代の料理は古代の農耕民のものと言える。

\*世界各地では独立して栽培が発生。1世紀までに世界の大半で大多数の人が農耕民となった。

# トルコ南東部、イラン西部 とレヴァント地方

- ◆ このエリアでも、農耕や牧畜の修練として適したモノはほんの一部しか無かった。
- ◆ 日本への農耕の伝来には諸説がある。
  - \*農作が伝わったのは縄文後期。紀元前3500年頃か。
  - \*縄文後期～弥生前期にかけて採取から耕作に本州全土に伝播か。
    - 縄文・弥生の期間についても諸説ある。
    - 縄文: 前14000年～前4000年
    - 弥生: 前10世紀～前3世紀

# 農業革命 定住・人口爆発・ 飽食のエリート層の発生

- ◆ 人類は農業革命によって、手に入る総量は増えたがより良い食生活や長い余暇には結びつかなかった。平均的農耕民は平均的狩猟民よりも苦勞して働いたのに見返りは劣った。農業革命は史上最大の詐欺だった。
- ◆ その犯人は 小麦、稲、ジャガイモなどの一握りの植物群でサピエンスはそれによって家畜化された。

\*定住 → 富める者の発生 → 略奪 → 争い → 戦争

# 贅沢の罿

- ◆ より楽な暮らしを求めたら、大きな苦難を呼び込んでしまった。歴史の数少ない鉄則の一つに贅沢は必需品となり、新たな義務を生じさせる。現在のメール交換も同じだ。

古代の狩猟採集民は、焼け付くような日差しの下で桶に水を入れて運んで麦を栽培する日々を過ごす羽目に落ち込んだ。

# 聖なる介入

- ◆ 農業革命は計算違いによって起きたことだが。 トルコ南東部のギョペクリ・テベ遺跡は不思議だ。

狩猟採集民の時代、紀元前9,500年に建てられた神殿のようだ。そこには、小麦を栽培した可能性があり、現在遅々としてではあるが調査中。

未だ5%しか実地調査は進んでいない。

# 農業革命の犠牲者たち

- ◆ 例えば、ヒツジたちの視点に立てば、家畜化された動物の大多数にとって、農業革命は恐ろしい大惨事だと言う印象は免れない。絶滅の瀬戸際に有るサイの方が、人間の食料にされるため小さな箱に押し込められて短い生涯を終える牛よりも、恐らく満足しているだろう。

# 第6章 神話による社会の拡大

## ◆ 未来に関する懸念の発生

- 農業革命のせいで、作物を保存、増やすために、未来は以前と比べようも無いほど重要になった。
- 未来に関する懸念の根本には、季節の流れに沿った生産周期だけではなく、農耕に付きまとう不確実性があつた。農耕が始まった時から未来に対する不安は人間の心に常につきまとうものとなった。
- 未来を心配することと同時に対策を考え始めた。
- こうした中、支配者・エリート層が台頭し彼らは余剰食糧によって暮らし、農耕民は生きていくのが精一杯となった。こうして没収された食料の余剰が戦争・芸術・哲学の原動力となった。



# 想像上の秩序

- ◆ 余剰食糧と輸送技術の組み合わせで人々は密集して暮らせるようになった。そして、都市が出来、人々は繋がった。
- ◆ 見知らぬ人どうしが何故協力出来たか。それは共有の神話のおかげだった。人間の想像力のおかげで、大規模で協力的なネットワークが構築された。
- ◆ こうしたネットワークは想像上の秩序だった。それを維持した規範は神話を信じる気持ちに基づいた。

# 神話

- ◆ ハムラビ法典、アメリカ独立宣言 :これらには普遍的な原理が存在する。だが、生物学的には権利、自由、平等等の言葉は無い。
- ◆ 想像上の秩序は邪悪な陰謀や無用の幻想では無い。むしろ、多数の人間が効果的に協力するための唯一の方法なのだ。

# 真の信奉者たち

- ◆ 自然の秩序は安定している。重力が明日働かなくなる可能性は無い。たとえ、人々が無重力を信じなくても。
- ◆ 対照的に想像上の秩序は常に崩壊の危険を持つ。神話は人々が信じなくなった途端に消えてしまう。
- ◆ その秩序を保護するために軍隊、警察、裁判所が休むことなく働いている。

# 脱出不能の監獄

- ◆ 社会を維持している秩序は偉大な神々、自然の法則によって生み出されていると主張する人は多い。人文科学や社会科学は以上を説明することに大半の精力を注いでいる。そのことには3つの要因がある。

①想像上の秩序は物質的世界に埋め込まれている。

中世では、人の真価は社会的ヒエラルキーと評判で決められた。

②想像上の秩序は私たちの欲望を形作る。

西洋人が大切にするのはロマン主義、国民主義、資本主義、人

間至上主義。ロマン主義は消費主義とかみ合い市場経済が誕生

③想像上の秩序は共同主観的である。

膨大な数の人々が共有する想像の中に想像上の秩序は存在。

・想像上の秩序から逃れる方法は無い。たとえ逃れても、より大きな監獄の運動場に走りこんで行くようなことだ。

# 第7章 書記体系の発明

- ◆ サピエンスの社会秩序は想像上で、人類はDNAの複製を作ったり、それを子孫に伝えたりするだけではその秩序は維持できない。
- ◆ 法律、習慣、手順、作法を守るためには意識的な努力が必要。それを怠ると社会秩序は即崩れてしまう。
- ◆ 人間の脳に帝国の情報を保存することはしてきた。但し、帝国サイズ`の龐大な量の保存にはサピエンスは向いていない。

脳は容量に限界があり、人間は死んでしまう(1世紀内の保存が限界)、人間の脳は特定の種類のデーター保存処理は対応できた。

農業革命後、著しく複雑な社会の出現で、従来と違った種類の情報が不可欠となった。——→ それは、数だ。 古代シュメール人が発明したデーター処理システムは 書記 と呼ばれる。

# クシムと言う署名・官僚制の驚異

- ◆ シュメール人の発明。書記とは記号を使って情報を保存する方法 : 6と10に基づく記載法の組み合わせ。人・動物・品物・領土・日付等を表す。
- ◆ クシムとは会計係りである役人か。数は税の徴収に使用されたか。同じようなことはインカでも。
- ◆ B.C3,000年～B.C2,500年にメソポタミア人によりシュメール語の体系に書き加えられ楔型文字に発展。
- ◆ 同時期にエジプト人は象形文字を開発。
- ◆ B.C1,200年に中国、B.C1,000年～500年に中央アメリカで書記体系が完成。但し、シュメールでは記録の保管、目録作成、検索等は他より一段優れていた。

# 数の言語

- ◆ 官僚制のデータ処理方法は人間の自然な志向方法から益々かけ離れていった。
- ◆ 9C以前に、古代インドで新しい不完全な書記体系が発明された。0~9まで10個の数を表すモノ。インドに侵入したアラビア人が広めて、アラビア数字と言われている。
- ◆ 現在の人口知能はコンピューターの二進法の書記体系だけで新しい種類の知能を生み出そうとしている。

## 第8章 想像上のヒエラルキーと差別

- ◆ 人類は大規模な協力ネットワークを維持するのに必要な生物学的本能を欠いていたのに、何故形成出来たのか。それは、想像上の秩序を生み出し書記体系を考案したから。
- ◆ その秩序とは、アメリカ独立宣言、白人至上主義、カースト制等。
- ◆ 経済のゲームでもガラスの天井(見えない障壁)により、不正に仕組まれていた場合も普通にある。



# 悪循環

- ◆ あらゆる社会は想像上のヒエラルキーに基づいているが、必ずしも同じヒエラルキーに基づいている訳では無い。殆どの場合、偶然の歴史的事情に端を発し、様々な集団の既得権がそのヒエラルキーに基づいて足並みを揃えて、何世紀もの間に洗練され、不滅のモノとした。
- ◆ それらは次のような色々なケースがある →

# 色々なケース

- ◆ アメリカ大陸における清浄：奴隷制度
- ◆ 男女間の格差
- ◆ 生物学的な性別と社会的・文化的性別
- ◆ 男性のどこがそれほど優れているか
- ◆ 筋力
- ◆ 攻撃力
- ◆ 家父長制の遺伝子

第2部農業革命はココで終了、第3部人類の統一に繋がります。